

# 『刎頸の交わり』原文・書き下し文・現代語訳

既ニ罷メテ帰ル國ニ。以ツテ相如ノ功ノ大ナルヲ、拝シテ為ス上卿ト。位ハ在リ廉頗之右ニ。

すでにやくにかえ しょうじよこうだい も はい じょうけいな くらいれんばみぎあ  
既に罷めて國に帰る。相如の功の大なるを以つて、拝して上卿と為す。位は廉頗の右に在り。

(趙王一行は秦王との会談を) 終えて帰国した。相如の功績が大きかったので、任命して上卿とした。(相如の) 位は廉頗より上であった。

廉頗曰ハク、「我為リ趙ノ將ト、有リ攻城野戰之大功。」

れんぱい われちょうしょうな こうじょうやせんたいこうあ  
廉頗曰はく、「我 趙の將と為り、攻城野戰の大功有り。

廉頗が言うことには、「私は趙の將軍となって、城攻めや野戦で大きな功績があった。

而ルニ藺相如ハ徒ダ以ツテ口舌ヲ為レシテ労ヲ、而シテ位居リ我ガ上ニ。

しかりんじょうじよたこうぜつもろうな しかし くらいわがかみお  
而るに藺相如は徒だ口舌を以つて労を為して、而して位我が上に居り。

※而(しか)るに=逆接、それなのに、しかし。

しかし藺相如はただ弁舌によって手柄を立てただけで、そして位は私より上にいる。

且ツ相如ハ素賤人ナリ。吾羞チテ、不レト忍レビ為ルニ之ガ下。」

か しょうじよ もとせんじん われは これ しもた しの

且つ相如は素賤人なり。吾羞ぢて、之が下為るに忍びず。」と。

さらに相如はもともと身分の低い者である。私は恥ずかしくて、相如の下であることを我慢することはできない。」と。

宣言シテ曰ハク、「我見バ相如ヲ、必ズ辱メント之ヲ。」

せんげん い われしょうじよみ かならこれ はずかし  
宣言して曰はく、「我相如を見ば、必ず之を辱めん。」と。

(さらに廉頗が) 言いふらして言うことには、「私は相如を見かけたら、必ず恥をかかせてやる。」と。

相如聞キ、不レ肯<sub>二</sub>ンゼ与<sub>二</sub>会<sub>一</sub>スルコトヲ。

しょうじよき とも かい がえん  
相 如聞き、与に会ふことを肯ぜず。

相如は（これを）聞いて、一緒に会おうとはしなかった。

相如毎<sub>二</sub>朝<sub>一</sub>スル時<sub>二</sub>、常<sub>二</sub>称<sub>レ</sub>シテ病ト、不レ欲<sub>下</sub>セ与<sub>一</sub>廉頗<sub>一</sub>争<sub>上</sub>レフコトヲ列<sub>ヲ</sub>。

しょうじょちょうう ときごと つね やまい しょう れんは れつ あらそ ほつ  
相 如 朝 する時 每に、常に病と称して、廉頗と列を争ふことを欲せず。

相如は朝廷に出仕する機会のたびに、常に病気ですと称して、廉頗と宮中での席の序列を争おうとはしなかった。

己ニシテ而相如出デテ、望<sub>一</sub>見ス廉頗<sub>一</sub>ヲ。

すでに しようじよい れんば ぼうけん  
已にして相 如出でて、廉頗を望 見す。

そのうち相如は外出して、廉頗を遠くから見かけた。

相如引レキテ車ヲ避ケ匿ル。

しょうじょくるま ひ さ かく  
相 如 車を引きて避け匿る。

相如は自分の車を引き戻して避け隠れた。

於レイテ是ニ、舍人相与ニ諫メテ曰ハク、

ここ お しゃじんあいとも いさ い  
是に於いて、舍人相与に諫めて曰はく、

※於レイテ是ニ=そこで、こうして

そこで、（相如の）家来たちが一緒に忠告して言うことには、

「臣ノ所-下以ノ去<sub>一</sub>リテ親戚<sub>一</sub>ヲ而事<sub>上</sub>フル君ニ者ハ、徒ダ慕<sub>一</sub>ヘバ君之高義<sub>一</sub>也。」

「臣の親戚を去りて君に事ふる所以の者は、徒だ君の高義を慕へばなり。」

※而=置き字（順接・逆接）

「私が親戚を離れてあなた様にお仕えする理由は、ただあなた様の立派な人格をお慕いしたことです。」

今、君与廉頗と同レジクシ列ヲ、廉君宣ニブレバ悪言ヲ、而君ハ畏レテ匿ル之ニ、恐懼スルコト殊ニ甚ダシ。

いま きみれんば れつ おな れんくんあくげん の きみおそ これ かく きょうく こと はなは  
今、君 廉頗と列を同じくし、廉 君 悪 言を宣ぶれば、君 畏れて之に匿れ、恐 懼すること殊に甚 だし。

ところが、あなた様は廉頗將軍と同じ序列となり、廉將軍が悪口を言いふらすと、あなた様は  
恐れて隠れ、恐縮することがとりわけひどいものです。

且ツ庸人スラ尚ホ羞レヅ之ヲ。況ンヤ於ニイテヲ将相ニ乎ヤ。

か ようじん な これ は いわ しょうしよう お  
且つ庸 人すら尚ほ之を羞づ。況んや 将 相 に於いてをや。

※「且ツAスラB。況ンヤC乎」=抑揚→「且(か)つAすらB。況(いは)んやCをや」→  
「AでさえBだ。ましてCの場合はなおさら(B)だ。」

普通の人でさえもこのようなことは恥ずかしく思います。まして將軍や大臣においてはなおさら  
(恥ずかしく思うこと)です。

臣等不肖ナリ。請フ辞シ去ラント。」

しんら ふしおう こ じ さ  
臣等不 肖なり。請ふ辞し去らん。」と。

※「請フ ~」=願望、「どうか ~ させてください、どうか ~ してください」

私たちは愚か者です。どうか(あなた様にお仕えするのを)辞めて去らせてください。」と。

藺相如固ク止メテ之ヲ曰ハク、「公之視ニルコト廉將軍ニヲ、孰-ニ与レゾト秦王ニ。」

りんあいじょかた これ とど い こう れんしょうぐん み しんおう いづ  
藺 相 如 固く之を止めて曰はく、「公の廉 将 軍を視ること、秦 王に孰与れぞ。」と。

藺相如がきつくこれを引き止めて言うことには、「あなたたちが廉將軍を見た場合、秦王とどちらが上であると思うか。」と。

曰ハク、「不レル若ガなりト。」

い し 曰はく、「若かざるなり。」と。

(家来たちが) 言うことには、「(廉將軍は秦王には) 及びません。」と。

相如曰ハク、「夫レ以<sub>二</sub>ツテシテモ秦王之威<sub>一</sub>ヲ、而相如廷<sub>一</sub>叱シテ之<sub>一</sub>ヲ、辱<sub>二</sub>ム其ノ群臣<sub>一</sub>ヲ。  
の  
しょうじょい そ しんおう い も しょうじよこれ ていしつ そ ぐんしん はずかし  
相 如 曰はく、「夫れ秦 王の威を以つてしても、相 如 之を廷 叱して、其の群 臣を 辱 む。」

相如が言うことには、「そもそも秦王の権威をもってしても（臆することなく）、私相如は朝廷で叱りつけて、その群臣を辱しめた。

相如雖レモ驚ナリト、独リ畏<sub>一</sub>レン廉將軍<sub>一</sub>ヲ哉。  
や  
しょうじょど いえど ひと れんしょうぐん おそ  
相 如 驚なりと雖も、独り廉 將 軍を畏れんや。

※「独リ ～ (セ)ン哉 (乎)」=反語、「独り ～ (セ)んや」、「どうして ～だろうか。(いや、～ない。)」

私相如は愚か者ではあるけれども、どうして廉將軍を恐れることがあろうか。(いや、ない。)

顧ダ吾念レフニ之ヲ、彊秦之所<sub>一</sub>以<sub>二</sub>ノ不<sub>三</sub>ル敢ヘテ加<sub>一</sub>兵<sub>二</sub>於趙<sub>一</sub>ニ者ハ、徒ダ以<sub>二</sub>ツテ  
吾ガ兩人ノ在<sub>一</sub>ルヲ也。  
なり  
た われこれ おも きょうしん あ へい ちよう くわ ゆえん もの た わ りょうにん あ も  
顧だ吾 之を念ふに、彊 秦の敵へて兵を 趙 に加へざる所以の者は、徒だ吾が 両 人の在るを以つてなり。

ただ私が考えるに、強国秦があえて軍隊を趙に向けない理由は、ただ私たち二人（=廉頗と相如）がいるからなのである。

今、両虎共ニ鬪ハバ、其ノ勢ヒ不<sub>二</sub>ラン俱ニハ生<sub>一</sub>キ。  
いま りょうことも たたか そ いきお とも い  
今、両 虎共に鬪はば、其の勢ひ俱には生きざらん。

※「不<sub>一</sub>俱ニハ ～ (セ)」=部分否定、「俱には ～ (セ)ず」、「両方ともは ～しない」

参考：「俱ニ不<sub>一</sub> ～ (セ)」=全部否定、「俱に ～ (セ)ず」、「両方とも ～しない」

もし今、二頭の虎ともいえる私たち二人が鬭うならば、なりゆきとして二人とも生き残ることはできないだろう。

吾ノ所<sub>一</sub>以<sub>ノ</sub>為<sub>レ</sub>ス此ヲ者ハ、以下<sub>ツテ</sub>先<sub>ニシテ</sub>国家之急<sub>一</sub>ヲ、而後<sub>中ニスルヲ</sub>私讐<sub>上ヲ</sub>  
なり也ト。」

吾の此を為す所以の者は、国家の急を先にして、私讐を後にするを以つてなり。」と。

私がこのようなことをしている理由は、国家の緊急の事を優先して、個人的な恨みを後回しにしているからである。」と。

廉頗聞レキ之ヲ、肉袒シテ負レヒ荊ヲ、因<sub>ニ</sub>リテ賓客ニ、至<sub>ニ</sub>リ藺相如ノ門ニ謝レシテ罪ヲ曰ハク、

れんばこれ き にくたん けい お ひんかく よ りんしょうじょ もん いた つみ しゃ い  
廉頗之を聞き、肉袒して荊を負ひ、賓客に因りて、藺相如の門に至り罪を謝して曰はく、

廉頗はこの話を聞き、片肌を脱いでいばらのムチを背負い（=罪人が刑を受ける格好）、ある賓客に取り次ぎを頼んで、藺相如の家に行き謝罪をして言うことには、

「鄙賤之人、不<sub>レ</sub>リシ知<sub>ニ</sub>ラ將軍ノ寛<sub>ナ</sub>ルコト之至<sub>ニ</sub>レルヲ此ニ也ト。」

ひせん ひと しょうぐん かん ここ いた し  
「鄙賤の人、將軍の寛なることの此に至るを知らざりしなり。」と。

「心がいやしい人間である私は、（藺相如）將軍の寛大さがこれほどまであるとは知りませんでした。」と。

卒ニ相与ニ驩ビテ為<sub>ス</sub>刎頸之交<sub>ニ</sub>ハリヲ。

つい あいとも よろこ ふんけい まじ な  
卒に相与に驩びて刎頸の交わりを為す。

最終的に互いに親しくなって、刎頸の交わりを結んだのである。

刎頸の交わり=相手のためならば、自分の首が切られても後悔しないほどの親しい交わり。